芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 45　55. 1

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　県芸術文化振興会議事務局
発行人・挾間正年　編集人・尾登一信

大分県の芸術教育について

大分県立芸術短期大学学長　首藤萬寿生

戦後（昭和23年）別府に緑丘高校が創立されて、芸術に関する専門教育の場ができた。当時の高等学校で音楽・美術の両学科をもった芸術系の学校は皆無で、文部省も期待をもってながめていた。しかし今までに類例のない学校であるため、カリキュラム、施設・設備の基準はなく、当時の関係者が経験を基にして相談をくり返し何とか開校までこぎつけた。海のものとも山のものともわからない状態の中で創立されたのであるが、ユニークな学校として大いに期待がかけられた。教師には美術に権藤種男、三浦直政、生野祥雲斎が顔を並べ、佐藤敬、山下鉄之助も時折顔を見せ、音楽には佐藤美子が指導するなど異色のスタッフであった。生徒には立川清人や古後信二も在籍して生徒同志で自発的によく勉強した。教室は借りものの状態で1年をすごし、卒業制作展、卒業演奏会を行なったわけであるが、戦後の荒廃した社会に小さいながらも、ほのぼのとした、さわやかな灯をともし得たことは大きな成果であった。中でも当時デザイナーといえば服飾デザイナーしか知らなかった社会にデザインの世界を認識させ得たことは一大成果であった。商業美術の世界で東九州は不毛の地であったが、この展覧会を契機として次第に興隆の道をたどったのである。

阿蘇の噴煙
県芸振副会長　宮崎　豊

その後緑丘高校に専攻科を設け、これを足がかりにして現在の芸術短期大学が生まれ、高校から短大への一貫教育の道が開けた。その専攻科時代に音楽科生が演じた歌劇「手古那」は大分で学生の手によって演じられた最初のものであり、好評を博したと同時に一つの道を開いたことで大きな意義があった。

芸術短期大学も昭和50年別府より大分に移転したが、今後の目標は四年制大学への昇格である。大分への移転によってその道が開けたと考えられる。大分芸術短期大学は芸術の短大としては全国で唯一のもので、高く評価されているが、東に東京芸術大学があり、近畿に京都芸大があるように西日本地域の芸術研究の拠点として大分芸大を何としてでも実現させたい。1980年代は地方の時代といわれるが、地方に密着した個性のある芸術を育てるために、東京芸大のまねでもなく、京都芸大の亜流でもない西日本地域の風土・特性に根ざした個性ある芸術大学とせねばならない。教育の目標もすぐれた作家・演奏家の養成は勿論であるが、美術・音楽を総合した芸術を担い得る人物の養成も考えたい。また、地方の産業・工芸についても最大の関心を持って貢献しなければならない。

教育制度も弾力的に変革を考え、生涯教育の問題、勤労学生の受入れ、大学の開放等を積極的に押し進め、地域の実情に応じた大学とせねばならない。

大分県立芸術短大も創立20周年を間近にし、緑丘高校創立から通算すると30数年になるが、この長い経験を反省し芸術教育の根本をかえり見ながら、1980年代を地域に密着した力強い芸術の創造と教育に力を尽したい。

学校教育における芸術教育

大分県教育庁指導第二部学校教育課長
猪　俣　士　郎

新時代に即した県づくりのためには人間性豊かで広い視野と創造力をもった活力ある人材の育成が肝要であるとの考えにたち、〝活力ある人材の育成〟を県勢振興の一つの柱として新しい県政が発足した。江藤教育長も豊かな人づくりを通じて母校の精神が県民の生涯の心の支えになるような故郷の心〝母校づくり〟を提唱した。これをふまえ学校教育の目指す指導の中核を〝調和のとれた人間性豊かな子どもの育成〟におくこととした。

教育課程が来年度小学校にはじまり56年中学、57年高校と次々に改訂されるが、そのねらいは〝人間性豊かな子どもの育成〟にあり、一人ひとりの子どもに対しともすれば知識の伝達に偏り、調和的な発達がおろそかになる傾向を改め、自ら考え正しく判断する力を養い創造的な知性と技能を育てること、自然愛や人間愛を大切にする豊かな情操を養うことなどが強調されている。人間性豊かな子どもを育成しようということはまさに今日的要請である。このような中で、芸術的な能力を伸ばし、創造の喜びを味わわせるとともに芸術を尊重する態度を育て、豊かな情操を養う芸術教育のもつ役割の重要さは今さらいうまでもない。

芸術を愛し、芸術に共感でき、人間的にうるおいのある豊かな情操をもつ子どもを育て、技術を越えた全人格的な人間形成に努めるところに芸術教育の究極のねらいがあり、学校教育において強調されねばならない点がある。

漱石は創作の喜びを「午前中の創作の喜びが午後の肉体の愉快になる」と書いている。

芸術学習が他の学習に、そして全生活に拡散されていく原動力であってほしい。芸術教育の成果が家庭生活の中に生き、大人になっても切れず、生涯、人生や生活の喜びとして生き続けるものとして継続されるよう学校教育の中に芸術教育が根強く培われていく必要がある。

大分の文学教育

大分県芸術文化振興会議顧問
米　田　貞　一

大分県で芸術文化振興運動が始まった1965年に新しい県立図書館ができ、その文化活動として公開県民講座を開いた。大学の先生に頼んで経済・教育・文学・音楽などの講座を始めたが、結局いろいろの都合で、私の講座だけが残り、今日まで十余年つづいている。対象は婦人で毎週1回、万葉から西鶴まで古典のテキストを年に2冊ずつ講読する。これが波及して別府、中津、臼杵、国東、日出、犬飼等にも同じような文学講座が開かれている。受講生は希望者、講師はボランティアだが、どこも楽しくやっている。

文学教育といえばだれでも学校中心に考えがちだが、生涯教育のあるべき形からいえば、社会人も主婦も老人も、めいめいが好む時期に好む学科を専門的に学習できてよいはずである。通信教育や放送大学がその方向にむかって整備されているが、もっと身近かなところに簡便な施設がほしい。ちかごろ各地の図書館や公民館、学校や団体でこうした文化講座がふえてきたのはありがたい。

大分県は戦時中の附属国語論争とか、戦後の作文コンクールなど国語教育の熱心なところだが、それが教育界から一般県民に広がらない。むしろ県民の粗雑な言語生活や低調な文芸活動がよく指摘される。川端康成がノーベル文学賞をもらったのは1968年、「日本人の心の精髄を、美しい日本語で表現した」という理由だったが、言うまでもなく、文学教育の基盤は国語教育である。つまり美しいことば（媒材）によって真実の人間をあらわし、作ることができるのである。

私の長い体験から言えば、文学講座にくるような人たちはみな学習に熱心で意欲的である。豊かな大地から美しい草や花が咲くように、すべての生活、芸術の基本である言語、文学を大事に守り、育てることによって、大分県の文化は見事に花開くであろう。

大分の美術教育

大分大学教育学部長
仲　町　謙　吉

全国造形教育連盟が全国造形教育研究大会を毎年１回開催し、「現代的・本質的課題」の討議を重ねているが、第14回（昭和36年）を本県で催し（現名称が生まれた）、全国的組織の理事県として、大分県造形教育研究会（会長・仲町謙吉・大分大）が組織されている。副会長に幼保部・友永治(別保幼)、小学校部・河村信雄(春日小)、中学校部・十時暁生(戸次中)、高等学校部・松尾哲臣（鶴高)、大学部・北野隆士（大分大）、特殊・吉村亨（新生養護）、事務局長に薬師寺逢美（宗方小）、次長各校種別に、指導部・庶務部・研修部・展覧会部・広報部・会計部と機構が整っていて組織的な活動を行っている。主な行事には、第25回大分県造形教育研究大会（本年度宇佐大会として四日市で盛大に、明年度は別府大会を催すべく準備が進められている）、全県下幼児・児童・生徒の参加する催しを年間３回もっているが、その第一が第28回創作美術展で、昨年８月に終わり、第21回デザイン展も昨年11月に催され、第18回版画展の募集中である。それぞれの回数が示すように年数を重ねており定着した深まりを見せている。画期的な事として昭和51年に1976図工美術研究全国大会を60学級の実際授業を展開して全国の美術教育家にうったえたことは高い評価を得ており、人間形成にかかわる本質的追求を、子どもを見つめることから「あすをひらく大分の子ども」とテーマをきめ、その実績をあげたものです。又、西日本美術教育連盟、理事県として運営に参加し、更には、九州幼児造形研究会の主宰県として、城島高原集会を開催して10年を重ね、全国でも最も早くから幼児教育に於ける造形教育の重要性を実証してきた。小学校では九州全体として雲仙集会をつくり自主研究を積み、中学校では全国中学校美術教育連盟の理事県として独自の課題解決に力強い歩みを続けている。その他展覧会等研究行事、又個人的研究指導者はこの紙数の中では挙げ得ない。

大分の音楽教育

別府大学短期大学部教授
辛　島　武　雄

音楽教育の場は主として学校教育の一教科として行われている。近年は楽器会社などが一つの目的を持つ音楽教室の経営、また音楽諸機関団体が開催する長期的行事の講習会なども、広義の音楽教育の場である。

新日本学制改革によって、戦前の〝唱歌教育〟から〝音楽教育〟と改称された昭和22年のころ、県下の音楽教師たちは、音楽教育の新理念の重要性を確認、時代の要求に応える新しい試みを実際に生かしつつ、教育向上に邁進し、大分県音楽教育研究会（県音研）を組織するまでに発展した。

県音研が主催する毎年の大分県音楽教育研究大会はすばらしく、昭和54年度第20回大野郡三重町大会は、幼稚園・小学校・中学校・高等学校の各部研究会が持たれ、関係者の努力と参加者の熱意によって、所期の目的を達している現況である。

別府大学初等教育科学生の〝声楽〟を担当している私は、最近新入学生の音楽的素養が一般的に深まったと思っている。しかし個人的な指導調査を進めてみると、音楽の三要素、リズム・メロディー・ハーモニーなど感覚的なものの身につける自らの努力を欠いでいる。現在は授業中に学生と音楽教育の在り方を研究しているが、現状をどのように把握するかが音楽教育出発点と思ったからである。

音楽の担当教師は、先ず自分の教育実情を分析しその目的観を日常教育生活に求め、目的達成の道を自らの意志で開拓せねばならない。一歩前進する音楽教育とは何か、自問自答出来る教師、こう私自身を励ましている。

教育作用の根底で、人間追求価値観としての真善美聖、４字が意味する内容から考えると、音楽教育も最終的には美育である。大分県における音楽教育も、県民文化の内容として一人でも多く、音楽美を追求する人を育てることと思っている。

大分の舞踊教育

大分県洋舞踊協会会長
樋　口　愁　枯

現在、大分県下には、洋舞踊研究所が八団体あります。

それぞれの歴史や、指導法、指導観、芸術観を異にしていますので、一概に「洋舞踊」という範疇で律することは、軽率のそしりを免がれませんが。特に県下の洋舞踊の発達が戦後の所産であることは、他の文化活動の歩みと似ています。

勿論、県下に戦前からも、舞踊家や指導者がいました。この人達の素地を基礎にして、今日の県下の洋舞踊が発展していることも事実です。

現在、洋舞踊研究所に通っている生徒は、およそ 600名ですが、その年令構成は、幼児、児童、生徒、学生、一般と、その中でも、幼児と児童が多を占めているのが実状です。

今日の「塾」教育の異常な発生から、おしなべて、研究所も「塾」の一環としておし流されていることが、心ある人々に危惧の念を抱かせていることもいなめません。

研究所が他の「塾」と異なる点は、舞踊習熟と上達が目標であるにせよ、その過程には教師と生徒との人間性のふれ合いによる「教育」が、絶対欠かせない条件であります。

洋舞踊を志す人々の、その殆どの人達が、一般教養としての「おけいこ」が主目的で、「プロ」目的という人の微々たることが如実に物語っていることです。だからといって、指導や芸術性をおろそかにしてよい、という訳ではありませんが。

大分県の洋舞踊界は、一つには、舞踊に対する正しい理解のための底辺拡充と、もう一つには、郷土に根づいた個性ある文化の創造に努力が払われています。

地方では育ちにくい障害や条件もあります。だからといって、芸術や文化が中央の土壌の占有でもありません。個々の創作活動でなし得ないものを、知と衆と、イデの調和をとりながら明日への模索を続けています。

大分の演劇教育

大分県高校演劇協議会顧問
高　橋　寿　満

高校の演劇部は、先生を困らせる生徒、勉学に集中しない生徒、眼はなしのできない生徒の集まりだという決めつけに立って、その存在を否定的に観ていた校長が少なくなかった時代がある。今は、そんな校長はいないはずである。

なるほど、進学だけが高校生活のすべてのような生徒は、手間がかからないし、学校の進学率は高めてくれるし、父兄に喜ばれるしで、学校にとっては金の卵であろう。また、体育の部は、学校の名誉を挙げてくれるし、他の文化部は大体においておとなしいので無事である。なぜか、演劇部の生徒はあつかいにくいという感じは、今でも職員室の空気として存在しているのではないだろうか。

その空気の中で、生徒を代弁し、生徒をまとめる指導教師の苦労や煩悶はなかなかなものではない。しかし、それだから、教育の原点に迫っている自負と闘志がわいてくるのではないだろうか。

真実と虚構のうす皮一枚ほどの間に、人間の存在そのものをつかみとらせて、ち密に計算された舞台に、感動と情熱のままにからだを叩きつけて美を表現させることは、まがいもなく、それは教育である。

そのためには、指導教師そのものが、なによりも、自らの人間性の陶冶をはからねばならないし、的確で清新な眼を養わねばならない。生徒は、その人柄とその眼を尊敬しはじめたとき、故ない批判をはね返す誇りがわいて集団のモラルをつくるのである。そして、高校生活のゆとりと充実を知るのである。教師の原点であるべき教室での力価が不十分であったり、新しい演劇論に耳をかたむけない不勉強な教師を見つめる生徒の腥めた眼は、教育そのものを否定する。

貴重な教育の場である演劇教育を、生徒たちのために、香り高く復興する責務を負う有識教師諸君の一体となっての立ち上がりが、80年代の高校演劇の盛衰を決するとみる。

滝 廉太郎生誕一〇〇年記念
演奏会を終えて

記念演奏会実行委員長　小長久子

去る八月二十四日滝廉太郎生誕一〇〇年の生誕日に大分文化会館において記念演奏会を多くの方々の御協力のおかげで無事盛大に終えることをできたことを感謝いたしております。

大分市で毎年六月二十九日の命日に万寿寺本堂で追悼演奏会をここ十年間開き、作詞作曲コンクールも実施してまいりましたが、五十四年は滝廉太郎生誕一〇〇年に当たるので何か企画したいと思っておりましたところ、県・市をはじめ大分合同新聞社、各団体の御協力を得て滝廉太郎生誕一〇〇年記念演奏会実行委員会も結成され、八月二十四日昼夜二回、子どもから大人に至るまで六〇〇人に上る出演者、四、〇〇〇人の観客を迎えて盛大に生誕日を祝うことができました。わが国で生誕一〇〇年を祝うことができるのは滝廉太郎が最初の人です。当日は東京・関西方面からわざわざ多数の方が見え、御親族十一名もお出いただき会に花を添えて下さいました。そしてまたこの会を益々有意義にしたことは滝廉太郎が留学したライプツィヒ音楽院にある学籍簿コピーがドイツ民主共和国より駐日大使館を通じて贈られたことです。これは先般、大分バス株式会社が記念バス券の原画をライプツィヒ音楽院に寄贈された返礼ということで、代理大使夫人イレーネ・ミュンヒ、通商部次官夫人イレーネ・グロースエーメのお二人が演奏会のステージで贈呈下さり、県・市より花束が贈られました。音楽にたずさわる私共にとって何よりものプレゼントです。

演奏会の参加団体は大分県三曲協会、大分県日本舞踊連盟、大分県洋舞踊協会、滝廉太郎生誕一〇〇年記念演奏会合唱団、大分交響楽団、大分県警察本部音楽隊、滝尾小学校トランペット鼓隊、そして県民オペラ・ジュニアオーケストラ・ジュニアーコーラスの皆さんで、それに竹田市少年少女合唱団、佐伯少年少女合唱団、日出町合唱団も参加下さいました。演出、構成は桂直久先生、独唱とナレーターには立川清登先生が御協力下さり、またフィナーレ「荒城の月」の編曲はNHKテレビで活躍されている南安雄先生がお引受け下さったことも一層会を盛り上げる大きな力になりました。

本演奏会の成功は、地方でジャンルの異った団体が大同団結をすれば、このような演奏会も可能なことを示すもので、大分文化運動の一つの記念すべき意義ある行事であったと思います。

耶馬渓町文化フェスティバル雑記

耶馬渓町教委・社会教育主事　野村真澄

本町文化フェスティバルについて残された記録をたどって、大要を御紹介させていただきます。

第一回昭和五十年十一月十六日。名士の講演と、謡曲・詩吟・舞踊・ピアノ・エレクトーンの実演発表とによって、人集めに成功し、書画・生花・刺繍・押花・写真・和洋裁・編物・盆栽の優秀展示品観賞という事で、入場者一、五〇〇人、ともかく一応の成果をあげました。

第二回は、年度始めから『ふれあい』という、テーマ設定で、地域住民にピーアールしました。十一月十四日には、保育園児、特養老人ホームの作品まで加わり、少年空手実技まで現われてきました。歌手鶴富子さんは、当日素人のど自慢入賞の一人でありました。

第三回五十二年十一月六日は、『愛』というテーマでした。映画と人形劇、弁論会、コーラス（中津短大）。少々程度が高まってきました。青年の食事コーナ。婦人会の加工食品、老人の伝承民具、花木愛好会の盆栽展示即売会。書道では、自作の短歌・俳句の自筆色紙や短冊、座右の銘、箴言等の条幅が異彩を放ちました。社会教育進展に寄与されたということで、二団体表彰、感謝状贈呈四個人。入場者二、五〇〇人。文化フェスティバルもようやく定着したようであります。

第四回は五十三年十一月四日・五日の二日制。テーマは、『創造と郷土芸能』町内五保育園児総参加（遊戯）、各種団体の代表によるパネル討議（過疎化の波を乗り越えて新しい地域づくりをどう進めるか）、若者の演劇『村人』の公開上演、のど自慢（ゲスト鶴富子さん）、郷土芸能（やんさ祭、カッパ楽、どんど焼）。

さて、第五回五十四年の十一月は？　テーマは？　おそらく二日制でなくては、町民の欲求を満たすことはむつかしいでしょう。のど自慢では、カラオケ登場で、人員制約に苦労するのではあるまいか。花木盆栽の展示即売会運営も、並大抵ではありません。謡美箱を備えつけたグループ（明日の耶馬渓町を考える会）の声もあがるでしょう。

ミそんな弱腰じゃ務まらんぞミ

県民演劇・演出助手　森　山　綾　子

今年、真新しいランドセルを背負った裏方一年生は、胸をわくわくさせて家を出た。が、その以外な重さに少々くたびれ、中味をのぞいてみた。ガキ大将が砂でもいれたんでは？　「……」何の変哲も無い一冊の本だけがある。何も書かれていない。そこで彼女は知ってることの全てを見聞きしたことをそこに書いて、皆の前で胸を張って披瀝した。みんなは不満気に言う、「わかりませーん」と。

とまあ、こんな風にして演出助手はスタートした。今年のような、現在をも包括する戦時下の人々の姿を描いた作品となれば、なおさら厳しさが必要になってくるのに、経験が無い故の不幸か、誰しも実感がない。しかも役者の時は、極端に言えば自分の役に責任を負いさえすれば済んでいたことが、そうはいかなくなった。「おい、○○は来てないのか」「はい、どうしても脱けられない用事が…。」「バカ言うな、電話して出て来るように言え。そんな弱腰じゃ務まらんぞ」「ハッ」

多勢のキャストの手綱をさばくのはなかなか容易ではない。何しろ悍馬ぞろい（おしとやかな馬もいるにはいるが）。どっちを向くか判らない。落馬なんて朝メシ前の数カ月だった。その上、小道具、衣裳、頭髪、券売り等の確認作業と、頭の中の回路はショートしそうで、真剣に考えると頭がホントに熱くなることを初めて経験した。

ともあれ公演は終了した。身体がふんわりしているみたいだ。きっと費さなくていいところに独りワイワイ騒いで、エネルギーを消耗していたのだろう。

がらんどうの舞台を、誰もいない客席から眺めていると、カーン、カーンという金鎚の音がしてくる。もうすぐ佐伯の公演がある。それまで身体にスタミナを貯えておこう、落馬しないように。

〃こども達のこわい目〃を意識しながら

県児童文化祭・美術担当　安　部　康　英

趣味とはいえ、仕事を持ちながら、時間を見出しての児童文化活動を続けられる皆さんへの大いなる敬意と、機会を得て美術部門でのお手伝いのできたことに先ず感謝したい。

かつて、その活動に参加していた頃から感じてきたことながら、子どもの目は実にこわい。美術部門が直接視覚に訴えることの不安が常にあったものだ。

今回の影絵「大分の昔ばなし」のように、子どもたちによく知られたものであればあるほど彼等自身の頭の中には、持ち前の想像力、創作力のたくましさから、すでにその場の情景から、登場人物の人相、性格、動作にいたるまで出来上がったものがある。つまりストーリーの展開に添った「絵」をえがいているわけである。そんな「絵」に対抗しつつ子どものそれをこわすことなく、効果的なしかもマイナスにならない「絵」をえがかなければならないわけである。

また、子どもは視覚から得た最も平面化された影絵の中にさえ、きちんとした立体をえがくことも容易である。台本に「一本の木」とあれば、ただ一本の木が私にとっては、その種類、色、形、大きさ、枝ぶり、画面構成上の効果等、多くの課題を与えてくれるし、演出者の意図にも添わなければならない。加えて、〃大敵〃の子どものこわい目を意識せざるをえない。その目が純粋であり、想像力そのものであることからの不安が常につきまとってくる。勇気の要る仕事である。はたしていい「絵」がえがけただろうか。

テーマや演出者の意図に添いながら、同一歩調のイメージづくりを基本に、〃こわい目〃を意識しながらも、子どもへの夢を支えるお手伝いになり得ればさいわいである。

〝食事どころかトイレにも〟

県立芸術会館・照明担当　渡　邊　舜多郎

「いい音楽や芝居をみて、美術館の展覧会まで接することができち。芸術の世界にひたりながら優雅に仕事ができるなんチ最高じゃナー」と知人に会う度に言われるのであるが、現実は大変なもので、一つの公演のために連日連夜リハーサルを重ね、わずか二時間の公演後で、全てバラしてしまう。その合間をぬって、芸館の自主公演のポスター・チラシ・入場券の依頼にとび回る。

アマチュア劇団の公演の場合、台本をもらい、それを読むわけであるが、勤務中はとうてい無理で、自宅で夜中に読み、リハーサルに立合い、演出家と打合わせを行い、その方針にそって各場面ごとの情景にあうように、光の色、方向、大きさ、強さをきめて、それにあった照明器具の配置、カラー番号を仕込図にかき、それを総合仕込図にかく。それをもとにして、舞台に器具をやり込み、配線をし点灯し、大道具をセットし、キャストを配置して明り合わせを行い、調光操作卓のフェダー目盛を記録し、演出家にどなられながらリハーサルを重ね、ゲネプロ、ダメなおし、本番と続き、幕が閉りしだいバラシと息つく暇もないほど、秒きざみのあわただしさである。

催物によっては、幕が朝の十時に上って夜の七時に下りるまで、一曲ごとの場面転換の連続で、食事どころか便所にも行けない有様になってしまう。また、旅で種々の催物が回ってくるが、これは私にとって井の中の蛙にならないための絶好の勉強の機会で、光の感じを盗ませてもらう、といったぐあいで、年間公演一五〇回、リハーサル二〇〇回を照明、舞台、音響各一名の担当でこなしている。夜の十一時に帰宅が一週間も続くことはざらで、「今夜は夕飯を家で食べるよ。」と連絡しておかないと、もらい出さないことになる。

ともかく、この仕事は好きでないとできないことで、美術出身の私としては、舞台の上に光で絵を描くことをたのしみとしている。

〝仕掛け人、兼よろず苦情うけたまわり人〟

県教育委員会・文化係長　二　宮　重　幸

10月1日の開幕行事からどうやら、ことしはゆっくりした気分で鑑賞の機会は望みうすのようです。

今までのように、「見るお客さん」から「仕掛ける裏方」にまわれば、あれこれ気苦労の多いことで毎日が疲れます。

それでも、「県内各地で芸術文化をもっと活発にしたい。」と願っているだけに芸術祭行事は手落ちのないようにと準備をすすめています。

ことしは、15周年を迎えて、なにか素晴らしい記念行事をしたいと企画はしたものの、相手あってのこと、あれこれ手をつくしても結局振りだしに戻ってしまいました。

すでに、各地の文化会館、市民会館では、自主事業が組まれていて、なかなか割りこめず、やっと関係者の協力が得られ佐伯文化会館を皮切りに記念公演の現実がみられるようになり、ホッとしたところです。

しかし、これからは入場者が少々気になるところです。

ところで、苦情の一つ二つも聞かされます。

「県の芸術祭（開幕公演・記念公演）に、なぜ金をとるのか、無料にすべきだよ。」

そう言われれば、あとの言葉もでにくい。

「県民、だれもが気軽に鑑賞できる芸術祭でなければ」と願っているだけに……。

しかし、開幕を前にして、今夜も猛練習を続けている出演者の皆さんを見る時、大入りにしなければとせきたてられます。

それにつけても、県内各地で、いろんな文化行事がもたれていますが、やはりどこも経費が悩みの種のようです。

やがて、3億円の文化基金ができた暁には、芸術祭はもちろん、いろんな文化行事も団体の手で華々しく開催してほしいものだと願いながら今後も頑張りたいと思います。

〈れんさい〉 豊後水道の文芸 その4

大分大学教授　佐々木　均太郎

下ノ江港と「海神丸」

小説「海神丸」は、臼杵市出身の女流作家・野上弥生子（昭和四十七年文化勲章受章）が大正十一年九月、「中央公論」に発表した作品である。

臼杵でおこった海難事件を素材にして、飢餓の極限におかれた人間が示す地獄図を克明な筆致で描いた弥生子の出世作である。

後に弥生子は「『海神丸』後日物語」（岩波「文学」一九六八・六）を書いているが、それをみると作品のほとんどが実話をもとにしている。「あの作品の成り立ちをいうなら、南九州の故郷の町に近い下ノ江と呼ぶ漁村から出航した六十トンのスクーナー船（実名高吉丸）が、漂流のあいだに引き起こした恐しい出来事を、生家の弟が伝えて来たメモにもとづいてわずかに虚構化したに過ぎず、船長、若い甥、それを食おうとして殺した二人の船頭、すべてが実在の人物である意味で、私にはたった一つのモデル小説である。」と弥生子は記している。

書出しに「十二月二十五日の午前五時、メイン・トップ・スクーナ型六十五トンの海神丸は、東九州の海岸に臨むK港を出帆した。」とあるが、このK港は臼杵湾に臨む下ノ江港のことである。出帆していく海神丸から見える豊後水道沿岸の朝の景色が作者の雄渾な筆で鮮やかに描かれている。

「海にはもうあらゆる種類の船が朝日にきらめいて浮かんでいた。夜釣りの船は一晩じゅう釣りためた獲物を町の朝市にかけるために大急ぎで沖から漕ぎ戻っていた。反対に今からぽつぽつ漕ぎだして、遠くの漁場で大物をねらおうとする漁船もあった。その他年寄りや、かみさんや、子供や、取りわけおおぜいの娘たちを船いっぱい盛り上がるほど積んで―実際娘たちは、大きな粉袋や海草類の束の上にまで、ピラミッド形に乗っていた―漕いで来る大伝馬が幾艘もあった。これらは海湾の左右にならんでいる漁村の部落、部落から、町をさして出かけて行く正月用の買い物船であった。」

大分県芸術文化基金 募金運動始まる

「大分県芸術文化基金」につきましては、県芸術文化振興会議の強力な取り組みによって、本年7月の第2回定例県議会で大分県芸術文化基金条例が成立し、積立金も 2,000万円（県費 1,000万円、寄附金 1,000 万円）が予算措置されました。県芸振会議は、3月7日の総会で決定した積立目標額3億円（県費1億5,000万円、 寄附金 1億5,000万円）を6か年で実現すること、昭和54年度は第1年次の基金計画として 4,000万円（県費 2,000万円、 寄附金2,000万円）の達成をめざして、現在加盟団体にはたらきかけ、会員1人1口 1,000円以上の拠出を行っております。

このほか、法人（企業）県民一般に対する具体的な募金運動を展開するため、10月4日に大分市で理事会を開き、8月9日の臨時総会で設置を決めた3対策理事会（加盟団体・法人・一般）ごとに、今後の取り組みを協議しました。

その結果、加盟団体に対しては、会員1人1口 1,000円の拠出金の未納団体または一部未納団体に納入を督促すること。法人関係については、早急に設立発起人会を開催すること。一般に対しては、街頭募金活動を実施することを申し合わせました。

設立発起人会は、10月31日の会合で大分県芸術文化基金促進協力会に切りかえられ、本格的な募金活動が行なわれることとなりました。

懸案の一般県民を対象とした募金活動は、第1弾として、11月3日の文化の日、午後1時から3時まで県芸振会議会長・副会長・全理事が参加して、大分市のトキハ前で街頭募金を実施、合わせて募金趣意書（3,000 枚）を配布し普及活動を行いました。

ヤマハとデアパソン
ピアノ
大分県特約
白沢ピアノ店
大分市若松通り
TEL 32－3930